



第217号

発行所

一般社団法人 芝蘭会
京都大学医学部同窓会

〒606-8315
京都市左京区吉田近衛町
TEL 075-751-2713
FAX 075-752-4015
E-mail: info@shirankai.or.jp
http://www.shirankai.or.jp

主な内容

- ② がん免疫総合研究センターの開所式
- ③ 京大関係病院長協議会定例総会
- ④ 校友会・KMSIFUNDだより
- ⑤ 支部だより「京都」「徳島」
- ⑥ 退任あいさつ / 学生の活動報告
- ⑦ 特別寄稿
- ⑧ 人事異動・会員計報

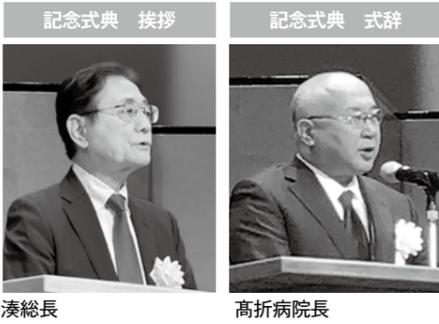
京都大学医学部附属病院 開設125周年 記念式典・祝賀会を挙

京都大学医学部附属病院では、令和6年12月21日(土)、「京都大学医学部附属病院開設125周年記念式典・祝賀会」を百周年時計台記念館にて挙行了しました。

この記念行事は、医学部附属病院の前身である医科大学附設病院が明治32(1899)年に開設、診療が開始されてから125周年を迎えたことを記念して挙行了したものです。

当日は芝蘭会各支部長をはじめ、政府・地方自治体関係者、国会議員・京都府議会議員・京都市議会議員、医師会関係者、関係病院長、寄附者など学外から104名、大学本部、部局長、院内関係者など学内から97名、計201名の参加がありました。

記念式典



湊総長 高折病院長

でいる旨説明され、出席者に対する謝辞が述べられました。

次に、奥野真文部科学省大臣官房審議官の代読による、伊藤学司文部科学省高等教育局長の祝辞、鈴木一弥京都府副知事の代読による、西脇隆俊京都府知事の祝辞、池田雄史京都市保健福祉局医務担当局長・保健所長の代読による、松井孝治京都市長の祝辞があり、それぞれ、医学部附属病院とのこれまでの関わりが述べられるとともに、今後への期待の言葉を頂戴しました。

その後は、来賓紹介、祝電・



池田局長 鈴木副知事 奥野大臣官房審議官



稲垣理事長 高橋所長

お祝いメッセージの披露を経て、記念講演を行いました。はじめに、高橋淳IPS細胞研究所長により、「神経再生研究の総括と展望」と題する講演があり、ご自身の学生生活から再生医療に携わることとなった経緯、主な対象疾患であるパーキンソン病、さらにはIPS細胞を用いた脳梗塞治療などについて、熱く語られました。

続いて、元当院病院長の稲垣暢也公益財団法人田附興風会医学研究所北野病院理事長により、「京都大学医学部附属病院のこれまでの歩みとこれからへの期待」と題する講演があり、当院が設置された経緯をはじめとした当院の125年に亘る歴史、その背景にある医学の発展を振り返りつつ、これからの超高齢・少子化社会を踏まえた当院に期待する役割など、多くの写真・図表とともに分かりやすく解説されました。



201名の列席者を迎えて挙行された記念式典

祝賀会

記念式典終了後は、会場を百周年記念ホールから国際交流ホールに移して、祝賀会を開催しました。

祝賀会は、高折病院長による挨拶で始まり、濱島高志京都府医師会副会長の代読による、松井道宣京都府医師会長の祝辞、佐和貞治京都府立医科大学附属病院長の祝辞、田中俊宏滋賀医科大学医学部附属病院長の祝辞がありました。

次に鏡開きを行い、奥野大臣官房審議官、服部泰直大学改革支援・学位授与機構長、湊総



田中病院長 佐和病院長 濱島副会長

長、石川冬木副学長、伊佐正医学研究科長、及び高折病院長の6名により、「よいしょ！よいしょ！よいしょ！よいしょ！」の発声とともに木槌が振り下ろされました。

続いて伊佐研究科長による乾杯の発声のもと、和やかな雰囲気の中で祝宴が行われました。

会場には、125周年記念事業の一環として外来診療棟正面玄関のウェルネスエリアを飾っていた、医科大学附属病院本館など新旧合わせた建物写真12枚の展示パネルを移設し、参加者の話題づくりに一役買っていました。

最後に、この記念式典・祝賀会を含む病院開設125周年記念事業の責任者である妹尾浩副病院長により謝辞が述べられ、盛会のうちに終了となりました。

令和6年度
秋の叙勲

◆瑞宝中綬章

政田 幹夫
(教室会員 薬剤部)
元大阪薬科大学長

この記念式典及び祝賀会は、開設から125年に亘り、日本をそして世界の最先端の医療を担う病院としてたゆまず歩んできた医学部附属病院について、学内外の関係者とともに振り返る節目の場となったとともに、これから100年後の当院のありたい姿について意見を交わす貴重な機会となりました。

あらためて皆様におかれましては、この場をお借りして、かくも盛大な記念式典・祝賀会を挙行できましたことに深く感謝申し上げます。今後とも指導・鞭撻のほど、どうぞよろしくお願いたします。



祝賀会の様子



謝辞を述べる妹尾副病院長 乾杯の発声を行う伊佐研究科長



鏡開きの様子

がん免疫総合研究センターの開所式を開催しました

がん免疫総合研究センター Bristol Myers Squibb 棟 (以下「BMS棟」) が竣工したことを記念し、2024年11月12日に開所式を開催しました。

開所式に先立ち、湊長博 総長、本庶佑 がん免疫総合研究センター長、伊佐正 医学研究科長、スティーブ・スギノ プリストル・マイヤーズスクイブ株式会社代表取締役社長、建築家の安藤忠雄氏による記者会見を行いました。

湊総長は、「この新しいがん免疫療法発祥の地で、基礎から臨床にわたる多くのエキスパートが共同し、がん免疫の新しい地平を開拓して、がんに苦しむ世界中の多くの人々の救命と生活の質の向上に向けて、より一

層の貢献をしていただくことを心から期待している」と述べました。本庶センター長は、「がん免疫総合研究センターの開所式を迎えられたことは感無量でございます。心ゆくまで安藤建築と科学の融合の真髄を楽しんでいただければ幸いです」と述べました。

午後からは、BMS棟にて、テープカットおよびドナープレート除幕式を行い、新研究棟の完成を祝いました。引き続きBMS棟内の「ニトリホール」において開所式を挙行しました。開所式には、オンライン参加も含めて、国内外の研究機関等から約250名の参加がありました。湊総長、伊佐

研究科長そして本庶センター長からの開会挨拶の後、来賓からがん免疫研究の発展への期待を込めた祝辞があり、続いて、本庶センター長に寄せられた患者からの手紙が紹介されました。湊総長は、「新設された素晴らしい研究施設で、本庶教授をリーダーとする多くの、特に若手の次世代研究者が、がん免疫研究の新しいステージに向けて道を切り拓いていくことを心から期待し、京都大学としても最大限の支援を尽くす」と述べました。本庶センター長は、新棟開設を支援くださった関係者への感謝を繰り返した上で、「2050年までに、人類を救うがん治療法の開発を目指して活動していきたい。私たちの今後にご期待ください」と述べました。続いて行われたパネ

パネルディスカッション

開所式後に行われたネットワークングセッションでは、来賓による祝辞に続いて鏡開きを行いました。会場は大いに盛り上がり、参加者が交流を深められる様子が見られました。セッションは終始和やかな雰囲気の中、盛況のうちに終了しました。



記者会見

左から、安藤氏、スギノ代表取締役社長、湊総長、本庶センター長、伊佐研究科長



テープカット

左から、伊佐研究科長、スギノ代表取締役社長、湊総長、松浦重和文部科学省大臣官房審議官 (研究振興局および高等教育政策連携担当)、安藤氏、本庶センター長



ドナープレート除幕式



鏡開き



左から、伊佐研究科長、榎山義雄 JCR ファーマ株式会社取締役常務執行役員、井村裕夫 神戸医療産業都市推進機構名誉理事長、似鳥昭雄 株式会社ニトリホールディングス代表取締役会長、湊総長



御来賓

総司会
ジャーナリストの
国谷裕子氏

山中伸弥 iPS 細胞
研究所名誉所長・教授

間野博行 国立がん
研究センター研究所長

安藤忠雄氏

スギノ代表取締役社長

松浦大臣官房審議官

石田靖雅 奈良先端科学
技術大学院大学准教授
(ビデオメッセージ)

Mien-Chie Hung
中国医薬大学長

Viktoria Li
駐日スウェーデン大使

Ashok Venkitaraman
シンガポール国立大学教授

後藤由季子
東京大学教授

令和6年度 京大関係病院長協議会 定例総会を開催しました

京都大学医学部附属病院は、2024年10月17日に、「令和6年度京大関係病院長協議会定例総会」を芝蘭会館にて開催しました。

本協議会は、同会員である関係病院長が親睦を深めるとともに、医学の進歩と発達および病院経営の合理化を企画することを目指す。定例総会を年1回開催しているものであり、学内外からあわせて110名余りが参加しました。

定例総会では、高折晃史 医学部附属病院院長の開会挨拶、「京大病院の現状について」の報告のあと、矢部大介 同教授 (糖尿病・内分泌・栄養内科学)、増田慎三 同教授 (乳腺外科)、加藤源太 同特定教授 (病床運

営管理部長、池口良輔 同教授 (リハビリテーション科)、廣田誠 同教授 (歯科口腔外科)、松本理器 同教授 (脳神経内科) より、新任者挨拶が行われました。

続いて、医師の働き方改革への取り組みや課題について、高折病院長がコーディネーターとなり、パネルディスカッションが実施されました。パネリストとして妹尾浩 副病院長、足立壯一 滋賀県立総合病院院長、寺井章人 倉敷中央病院院長より、それぞれ講演が行われたのち、質疑応答では、活発な意見交換が行われました。

その後、武藤 医学部附属病院教授 (腫瘍内科) より京大病院治験ネットワーク事業ウィンググループの進捗状況、高折病院より京大病院125周年記念事業およびドナルド・マクドナルド・ハウス京都について報告があり、充実した定例総会となりました。



寺井病院長
(倉敷中央病院)

足立病院長
(滋賀県立総合病院)

妹尾副病院長

高折病院長



パネルディスカッションの質疑応答では活発な意見交換がなされた

京都大学医学部 校友会・教育研究支援基金 (KMS-FUND) だより

T606-8501
京都市左京区吉田近衛町
京都大学医学研究科事務部
TEL 075-761-2467
FAX 075-752-1528
Mail-Address:
kyoto-kms-fund@office.
med.kyoto-u.ac.jp

新校友会会員と京大医学部の歴史を巡る

キャンパスツアー

校友会 親睦委員会
小川ひろみ

好天に恵られました令和6年5月18日(土)、校友会では新入学生の保護者を対象とした第9回キャンパスツアーを実施致しました。3月の合学者通知に同封しました案内への希望者はありがたいことに多数で、参加者は校友会役員・親睦委員も含めて総勢66名となりました。

医学福祉研究所長の小泉昭夫 京大名誉教授より、「京都大学医学部資料館展示物の紹介」 京都大学医学部の歴史の断片」と題した講義を受けました。貴重な模擬授業体験に参加者一同熱心に小泉先生のお話に耳を傾

けました。講義は、記念講堂の入り口にある第七代総長荒木寅三郎先生の胸像と「不失其正」(其の正を失わず)の書のご説明に始まり、歴代文化勲章受賞者及び文化功労者の方々の紹介もありました。京都大学医学部の歴史、さらには日本の医学の歴史を知ることができ、参加者からも「大変勉強になった」、「京大医学部に脈々と受け継がれる伝統について知ることができて良かった」との感想が聞かれました。講義のあとは先ほどのお話を思い出しつつ、地下資料室で大正期の心電計や母子像『解体新書(複製)』、大理石の解剖台などを見学しました。

その後、この3月に竣工した、ノーベル賞受賞者・本庶佑京大名誉教授が初代センター長を務められているがん免疫総合研究センター(CCI)の外観を眺めながら、医学図書館、医学プラザ、メディアライノベーションセンター(MIC棟)へと移動しました。その途中の旧産婦人科病舎前では、アールを描く玄関や歴史を感じる重厚な佇まいの建物を見上げて、しばし見入っておられる参加者が多くいらっしゃいました。

MIC棟では、加齢医学講座・鍋島陽一特任教授から貴重なお話をお聞かせいただきました。数ある医学・医学部のミッシェンの中でもメディアライノベーション、すなわち新しい医療を作り出すことの重要性、次世代医療はどこまで進むのか、軽度認知障害(MCI)スクリーニング検査のことなど興味深く拝聴しました。認知症に関するお話に熱心にメモを取る参加者の姿がとて印象的でした。まだまだ研究成果をうかがいたい気持ちでしたが、いずれまた鍋島先生チームからご公表いただける機会を心待ちにしたいと思います。最後に鍋島先生ととも

に参加者一同でMIC棟をバックに記念撮影をして午前中のツアーは終了となりました。今年5月5日に会食も行われました。昼食は、芝蘭会館山内ホールにて、シランカフェ系列の「まんざら亭」の和風弁当に舌鼓を打ちながら和やかに歓談する時間となりました。新入生保護者の皆様と校友会役員・親睦委員も一緒にのテーブルで新入生の新しい生活、クラブ活

動や下宿の話などで盛り上がり、親睦を深めることができました。午後からは、普段は非公開の重要文化財「清風荘」を見学しました。西園寺公望の別邸であったものが京都帝国大学へと寄贈されたもので、現在は京都大学の迎賓館として、迎賓や会議、教育活動などに使用されています。街中にありながら、一歩足を踏み入ると周りの喧騒とはかけ離れた静寂さに身を包まれ心が洗われるようでした。

清風荘管理事務所の奥田昭彦様より、建造物の概要説明に加え、数多くの要人をお迎えされた時の貴重なエピソードなどもご披露いただきました。歴史的建造物のお部屋から眺める、手入れの行き届いたお庭の素晴らしさに、参加者は何度も感動の声をあげておられました。

基礎医学記念講堂の下段教室で、小泉昭夫名誉教授(右段前列左から2人め)の講義を終えて



KMS-FUNDの活動紹介リーフレット(裏面は寄付金申込書)



最後になりましたが、医学部および芝蘭会の事務方の皆様には準備の段階から多大なるお力添えを賜り、大変お世話になりましたことを、この紙面をお借りしまして厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございます。

**第18回
京都大学医学部校友会
総会・講演会のお知らせ**

日時 令和7年9月20日(土) 午後
場所 芝蘭会館本館 稲盛ホール
特別講演会
講演会終了後、懇親会パーティー
申し込み受け付けは おって連絡いたします。

令和6年度 卒業生代表あいさつ 柔らかな眼差しに 支えられた日々を 船出のときに思う

吉原 悠真



暖かな日差しを感じ、萌ゆる春に桜の開花を予感する季節となりました。

本日は卒業式及び校友会主催の祝賀会を開催いただいたことに卒業生一同心より御礼申し上げます。また、教職員の皆様をはじめ、ご来賓の方々、保護者の皆様にはご披露いただきました。歴史的建造物のお部屋から眺める、手入れの行き届いたお庭の素晴らしさに、参加者は何度も感動の声をあげておられました。

朝から始まったキャンパスツアーでしたが、予定の全ての見学を終え夕方に解散となりました。お帰りの際には、参加者の皆様から喜びと感謝のお声がけをたくさん頂戴し、関係者一同ホッとすると共に、この行事に携わられたことを心から嬉しく思っていました。

最後になりましたが、医学部および芝蘭会の事務方の皆様には準備の段階から多大なるお力添えを賜り、大変お世話になりましたことを、この紙面をお借りしまして厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございます。

支部だより

京都

オリジナリティあふれる オンリー・ワンの 医学研究科をめざして

令和6年7月7日(日)、芝蘭会館(京都大学医学部医学科百周年記念施設)稲盛ホールにて、令和6年度芝蘭会京都支部総会が開催されました。

最初に、総会が行われました。まず、支部長の森洋一先生が挨拶をされ、時事ネタの七夕選挙に絡め、変動する社会について述べられました。そのあと、庶務、会計報告、本年度運営報告と続きました。

●京大医学研究科のめざましい躍進
その後、京都大学大学院医学研究科研究科長の伊佐正先生による特別講演会がありました。まずは、人事異動を含む京都大学医学研究科・医学部の近況報告がありました。がん免疫総合研究センター Bristol Myers Squibb 棟の竣工、国際シンポジウム「TMAT Kyoto University International Symposium」の開催、医学研究科附属のヘルスセキュリティセンターと同医療DX教育研究センターの設置、クリニカルアナトミラボ(CAL)の充実(surgical training)、医学・生命科学支援機構(iSAL)の活動、京大医学研究科・医学部創立125周年記念事業など、最新のトピックスには事欠きませんでした。その後、伊佐先生ご自身の経歴を話されました。京都市左京

区のお生まれで、京大近辺に縁があることや、灘高校、東京大学での学生生活、国内外の研究者との共同研究のお話など、現在の立ち位置に至られるまでの興味深いエピソードを聞くことができました。

●研究者としての端緒と
神経科学の最前線

続いて、ご自身の専門分野についてのお話がありました。まずは神経解剖学の教科書として知られる「Neurological Anatomy in Relation to Clinical Medicine」の著者、Alf Bradaの論文「脳卒中後の自己観察と神経解剖学的考察」のお話から始まりました。

この論文は、自身が脳卒中になった後のケースレポートですが、往時の「神経科学者は心などを論ずるのではなくきつちりとした現象の記述に留めるべし」という風潮に抗うかのように、損傷患者の「こころ」の問題に踏み込んだものであるという点でとても興味深い論文でした。

続いて、「小さい脊髄損傷後の手指の巧緻運動の機能回復」と「大きな脊髄損傷後の手の運動の機能回復」の2つのテーマに沿って話されました。伊佐先生は、皮質脊髄路(幹線道路)を損傷させて脊髄固有ニューロン(脇道)を経由せざるを得なくなったサルがおおよそ1か月で機能を回復するという再現性の高い実験結果に好奇心を掻き立てられ、今に至るまで研究を続けているそうです。

ウイルスベクターなどを用いた分子生物学的なアプローチなど、様々な学際的研究により、運動機能の回復過程において中枢神経系の各領域がいかにして再活性化され、変化するかについて、詳細な成果を聞くことができました。通常は情動(モチベーション)を支配している側核の活動が、運動の機能回復には増加して、機能回復に貢献するという結果は、リハビリの臨床現場の肌感覚とも一致

しているようで、たいへん興味深かったです。垂半切モデルを利用した、脊損の程度が大きな場合の実験においても、リハビリや電気刺激によって残存する代償回路が増強されるという結果を得ており、ニューロモジュレーション法と呼ばれるこのような手法によって、成熟脳においても大規模な可塑性が誘導されることが示唆されているとのことでした。こうした研究により、薬物、細胞移植などで癒痕を融解し、神経線維を再交通させるという従来の脊損研究に「新たな風」が吹いているようです。

●日本の科学力を押し上げるには
なにが必要か
最後に、日本の科学力の衰退についてのお話がありました。日本の年間論文数の世界ランキングはそこまで衰退してはいないものの、トップ10%の論文数の同ランキングは著しい衰退を見せているという結果は非常にショッキングに思えました。しかし、実際のところは、日本の被引用数トップ10%の論文の数は実は漸増しているそうです。しかも近年は大学の定員削減により教員数が減り続けている状況を見ると、教員一人あたりのトップ10%の論文数は実は減っていないことがわかりました。その一方で、臨床医学、基礎医学ともに、アジア諸国を含む他国の大学は大きく成長・拡大して勢力を伸ばしており、東大、京大を含む日本の大学の相対的位置が低下しているというのが実情だそうです。

その背景には、我が国においては大学が「成長のカギ」と見なされていないことに加えて、年々増えゆく社会保障費をまかなうために国家の経費が導入され、成長分野への投資が困難になっていることが挙げられます。国としての在り方を考えさせられました。

最後には、伊佐先生の考える京都大学の未来を語られ、「ナンバー・ワンよりオンリー・ワン」を標語に、オリジナリティある研究科にしていきたいと述べられていました。その後の質疑応答も盛り上がり、特別講演会が締めくくられました。



研究内容についてはほとんど知識のない私でしたが、伊佐先生の講演はとても勉強になるものでした。

●イメーシングで解明される
創傷治療のメカニズム
次に、徳島大学医学部顕微鏡解剖学教授に就任された寺井健太先生による講演があり、マウスを用いた生体イメーシング研究についてご紹介いただきました。マウスの耳に傷をつけると、ERKの活性が傷から広がり、周囲の細胞でもERKが活性化して細胞集団が傷口へ向けて移動します。この過程でERKとERKの活性が阻害されると、0.5mm以上の距離においてERK活性化の波が到達せず、細胞集団が移動が阻害され、創傷治癒が遅延するそうです。創傷治癒に魅力が伝わることで、多くの学生が興味を持つことを願っていますと述べられました。

●MIR-33の抑制による
動脈硬化を治療
その後、京都大学大学院医学研究科循環器内科学教授の尾野 巨先生から京大医学研究科・医学部の現状報告がありました。医学研究科・医学部の運営体制と兼任教授、新任教授陣のご紹介にはじまり、各賞の受賞、がん免疫総合研究センター、第5回京都大学ライフサイエンスセンターショーケース、トランスレーショナルリサーチに関するITMAT京都大学国際シンポジウム、ヘルスセキュリティやDXセンターの設置、クリニカルアナトミラボ(CAL)の充実に向けての整備、iSALの活動、125周年記念事業などについてお話しいただきました。加えて、KMSI-FUND(研究活動支援基金)について説明をいただきました。

●イメーシングで解明される
創傷治療のメカニズム
次に、徳島大学医学部顕微鏡解剖学教授に就任された寺井健太先生による講演があり、マウスを用いた生体イメーシング研究についてご紹介いただきました。マウスの耳に傷をつけると、ERKの活性が傷から広がり、周囲の細胞でもERKが活性化して細胞集団が傷口へ向けて移動します。この過程でERKとERKの活性が阻害されると、0.5mm以上の距離においてERK活性化の波が到達せず、細胞集団が移動が阻害され、創傷治癒が遅延するそうです。創傷治癒に魅力が伝わることで、多くの学生が興味を持つことを願っていますと述べられました。

●MIR-33の抑制による
動脈硬化を治療
その後、京都大学大学院医学研究科循環器内科学教授の尾野 巨先生から京大医学研究科・医学部の現状報告がありました。医学研究科・医学部の運営体制と兼任教授、新任教授陣のご紹介にはじまり、各賞の受賞、がん免疫総合研究センター、第5回京都大学ライフサイエンスセンターショーケース、トランスレーショナルリサーチに関するITMAT京都大学国際シンポジウム、ヘルスセキュリティやDXセンターの設置、クリニカルアナトミラボ(CAL)の充実に向けての整備、iSALの活動、125周年記念事業などについてお話しいただきました。加えて、KMSI-FUND(研究活動支援基金)について説明をいただきました。

●MIR-33の抑制による
動脈硬化を治療
その後、京都大学大学院医学研究科循環器内科学教授の尾野 巨先生から京大医学研究科・医学部の現状報告がありました。医学研究科・医学部の運営体制と兼任教授、新任教授陣のご紹介にはじまり、各賞の受賞、がん免疫総合研究センター、第5回京都大学ライフサイエンスセンターショーケース、トランスレーショナルリサーチに関するITMAT京都大学国際シンポジウム、ヘルスセキュリティやDXセンターの設置、クリニカルアナトミラボ(CAL)の充実に向けての整備、iSALの活動、125周年記念事業などについてお話しいただきました。加えて、KMSI-FUND(研究活動支援基金)について説明をいただきました。

●イメーシングで解明される
創傷治療のメカニズム
次に、徳島大学医学部顕微鏡解剖学教授に就任された寺井健太先生による講演があり、マウスを用いた生体イメーシング研究についてご紹介いただきました。マウスの耳に傷をつけると、ERKの活性が傷から広がり、周囲の細胞でもERKが活性化して細胞集団が傷口へ向けて移動します。この過程でERKとERKの活性が阻害されると、0.5mm以上の距離においてERK活性化の波が到達せず、細胞集団が移動が阻害され、創傷治癒が遅延するそうです。創傷治癒に魅力が伝わることで、多くの学生が興味を持つことを願っていますと述べられました。

●MIR-33の抑制による
動脈硬化を治療
その後、京都大学大学院医学研究科循環器内科学教授の尾野 巨先生から京大医学研究科・医学部の現状報告がありました。医学研究科・医学部の運営体制と兼任教授、新任教授陣のご紹介にはじまり、各賞の受賞、がん免疫総合研究センター、第5回京都大学ライフサイエンスセンターショーケース、トランスレーショナルリサーチに関するITMAT京都大学国際シンポジウム、ヘルスセキュリティやDXセンターの設置、クリニカルアナトミラボ(CAL)の充実に向けての整備、iSALの活動、125周年記念事業などについてお話しいただきました。加えて、KMSI-FUND(研究活動支援基金)について説明をいただきました。

●MIR-33の抑制による
動脈硬化を治療
その後、京都大学大学院医学研究科循環器内科学教授の尾野 巨先生から京大医学研究科・医学部の現状報告がありました。医学研究科・医学部の運営体制と兼任教授、新任教授陣のご紹介にはじまり、各賞の受賞、がん免疫総合研究センター、第5回京都大学ライフサイエンスセンターショーケース、トランスレーショナルリサーチに関するITMAT京都大学国際シンポジウム、ヘルスセキュリティやDXセンターの設置、クリニカルアナトミラボ(CAL)の充実に向けての整備、iSALの活動、125周年記念事業などについてお話しいただきました。加えて、KMSI-FUND(研究活動支援基金)について説明をいただきました。

●イメーシングで解明される
創傷治療のメカニズム
次に、徳島大学医学部顕微鏡解剖学教授に就任された寺井健太先生による講演があり、マウスを用いた生体イメーシング研究についてご紹介いただきました。マウスの耳に傷をつけると、ERKの活性が傷から広がり、周囲の細胞でもERKが活性化して細胞集団が傷口へ向けて移動します。この過程でERKとERKの活性が阻害されると、0.5mm以上の距離においてERK活性化の波が到達せず、細胞集団が移動が阻害され、創傷治癒が遅延するそうです。創傷治癒に魅力が伝わることで、多くの学生が興味を持つことを願っていますと述べられました。

●MIR-33の抑制による
動脈硬化を治療
その後、京都大学大学院医学研究科循環器内科学教授の尾野 巨先生から京大医学研究科・医学部の現状報告がありました。医学研究科・医学部の運営体制と兼任教授、新任教授陣のご紹介にはじまり、各賞の受賞、がん免疫総合研究センター、第5回京都大学ライフサイエンスセンターショーケース、トランスレーショナルリサーチに関するITMAT京都大学国際シンポジウム、ヘルスセキュリティやDXセンターの設置、クリニカルアナトミラボ(CAL)の充実に向けての整備、iSALの活動、125周年記念事業などについてお話しいただきました。加えて、KMSI-FUND(研究活動支援基金)について説明をいただきました。

●MIR-33の抑制による
動脈硬化を治療
その後、京都大学大学院医学研究科循環器内科学教授の尾野 巨先生から京大医学研究科・医学部の現状報告がありました。医学研究科・医学部の運営体制と兼任教授、新任教授陣のご紹介にはじまり、各賞の受賞、がん免疫総合研究センター、第5回京都大学ライフサイエンスセンターショーケース、トランスレーショナルリサーチに関するITMAT京都大学国際シンポジウム、ヘルスセキュリティやDXセンターの設置、クリニカルアナトミラボ(CAL)の充実に向けての整備、iSALの活動、125周年記念事業などについてお話しいただきました。加えて、KMSI-FUND(研究活動支援基金)について説明をいただきました。

●イメーシングで解明される
創傷治療のメカニズム
次に、徳島大学医学部顕微鏡解剖学教授に就任された寺井健太先生による講演があり、マウスを用いた生体イメーシング研究についてご紹介いただきました。マウスの耳に傷をつけると、ERKの活性が傷から広がり、周囲の細胞でもERKが活性化して細胞集団が傷口へ向けて移動します。この過程でERKとERKの活性が阻害されると、0.5mm以上の距離においてERK活性化の波が到達せず、細胞集団が移動が阻害され、創傷治癒が遅延するそうです。創傷治癒に魅力が伝わることで、多くの学生が興味を持つことを願っていますと述べられました。

●MIR-33の抑制による
動脈硬化を治療
その後、京都大学大学院医学研究科循環器内科学教授の尾野 巨先生から京大医学研究科・医学部の現状報告がありました。医学研究科・医学部の運営体制と兼任教授、新任教授陣のご紹介にはじまり、各賞の受賞、がん免疫総合研究センター、第5回京都大学ライフサイエンスセンターショーケース、トランスレーショナルリサーチに関するITMAT京都大学国際シンポジウム、ヘルスセキュリティやDXセンターの設置、クリニカルアナトミラボ(CAL)の充実に向けての整備、iSALの活動、125周年記念事業などについてお話しいただきました。加えて、KMSI-FUND(研究活動支援基金)について説明をいただきました。

●MIR-33の抑制による
動脈硬化を治療
その後、京都大学大学院医学研究科循環器内科学教授の尾野 巨先生から京大医学研究科・医学部の現状報告がありました。医学研究科・医学部の運営体制と兼任教授、新任教授陣のご紹介にはじまり、各賞の受賞、がん免疫総合研究センター、第5回京都大学ライフサイエンスセンターショーケース、トランスレーショナルリサーチに関するITMAT京都大学国際シンポジウム、ヘルスセキュリティやDXセンターの設置、クリニカルアナトミラボ(CAL)の充実に向けての整備、iSALの活動、125周年記念事業などについてお話しいただきました。加えて、KMSI-FUND(研究活動支援基金)について説明をいただきました。

●イメーシングで解明される
創傷治療のメカニズム
次に、徳島大学医学部顕微鏡解剖学教授に就任された寺井健太先生による講演があり、マウスを用いた生体イメーシング研究についてご紹介いただきました。マウスの耳に傷をつけると、ERKの活性が傷から広がり、周囲の細胞でもERKが活性化して細胞集団が傷口へ向けて移動します。この過程でERKとERKの活性が阻害されると、0.5mm以上の距離においてERK活性化の波が到達せず、細胞集団が移動が阻害され、創傷治癒が遅延するそうです。創傷治癒に魅力が伝わることで、多くの学生が興味を持つことを願っていますと述べられました。

●MIR-33の抑制による
動脈硬化を治療
その後、京都大学大学院医学研究科循環器内科学教授の尾野 巨先生から京大医学研究科・医学部の現状報告がありました。医学研究科・医学部の運営体制と兼任教授、新任教授陣のご紹介にはじまり、各賞の受賞、がん免疫総合研究センター、第5回京都大学ライフサイエンスセンターショーケース、トランスレーショナルリサーチに関するITMAT京都大学国際シンポジウム、ヘルスセキュリティやDXセンターの設置、クリニカルアナトミラボ(CAL)の充実に向けての整備、iSALの活動、125周年記念事業などについてお話しいただきました。加えて、KMSI-FUND(研究活動支援基金)について説明をいただきました。

●MIR-33の抑制による
動脈硬化を治療
その後、京都大学大学院医学研究科循環器内科学教授の尾野 巨先生から京大医学研究科・医学部の現状報告がありました。医学研究科・医学部の運営体制と兼任教授、新任教授陣のご紹介にはじまり、各賞の受賞、がん免疫総合研究センター、第5回京都大学ライフサイエンスセンターショーケース、トランスレーショナルリサーチに関するITMAT京都大学国際シンポジウム、ヘルスセキュリティやDXセンターの設置、クリニカルアナトミラボ(CAL)の充実に向けての整備、iSALの活動、125周年記念事業などについてお話しいただきました。加えて、KMSI-FUND(研究活動支援基金)について説明をいただきました。



ろ、血中のHDL-Cが上昇するだけでなく、動脈硬化、さらには心臓の線維化や動脈瘤の形成、そして脳内のアミロイドβも減少することが分かりました。さらに、げつ菌類以外の大型の哺乳類においては、中性脂肪の合成に大事なSREBP-1遺伝子のイントロンにもmiR-33があって、こちらはmiR-33bと呼ばれています(マウスでは欠失。先のmiR-33はmiR-33aと呼ばれる)。このmiR-33bをマウスにノックインしたところ、HDL-Cが減少し、動脈硬化が悪化しました。

しろ不要で、上記の疾患を引き起こしていると推察されました。そこで、miR-33a/bを抑制することでこれらの疾患を治療できるのではないかと考え、miR-33a/bを抑制するようなアンチセンスオリゴヌクレオチドの作成に取り掛かりました。その結果、効果的な核酸が得られ、動脈瘤モデルおよびMASHモデルにおいて治療効果を示すことができました。

不全は「パンデミック」とも言われるそうです。その理由として、①患者数が多い、②死亡率が高い、③入院治療が必要で再入院を要することが多い、の三点が挙げられるとのこと。日本は心不全の入院日数が長いと言われておりましたが、入院日数は減ってきているとのこと。ただし、一年死亡率や、三十日後、一年後の再入院率は変わっていないというデータがあるそうです。

別の試験では、左心室の収縮能力が保たれた心不全(HFpEF: LVEF > 40%)に対しても、利尿薬を投与しなくても同様に予後が改善することが示されました。また、2023年の研究で、SGLT2をコードする遺伝子の変異と心不全の関係について、変異を持つほうが心不全のリスクが少ない(オッズ比0.9)ことが判明し、このことからSGLT2阻害薬は心不全に対して非常に強力な薬剤であることが考えられます。

米国のガイドラインでは、HFrEFに対してSGLT2阻害薬がClass IIで推奨されており、ヨーロッパのガイドラインにおいても、HFrEF等に対してClass I、エビデンスレベルAで推奨されています。これを受けて日本の心不全のガイドラインも来春に切り替わるそうです。

また、心不全に対してはフアンタステック4とよばれるARNI、β遮断薬、MRA、SGLT2阻害薬の4剤を使うことが推奨されていますが、この中でもSGLT2阻害薬は血圧の低下といった副作用が少なく使いやすいため、中止されることも少ないこととされています。また、「どの順番でどの程度使うのか」が焦点となり、STRONG-HF試験におけるguideline-directed medical therapy (GDMT)に則ったこれら薬剤の急速増量戦略がEFによらず効果的だという結果が得られたそうです。

しかし、GDMTの実施に苦慮した症例も紹介されていて、心臓の収縮力も悪く、心電図のQRS間隔も広く、投薬をいろいろ試すなど難航していたが、MitraClip手術により、僧帽弁の逆流を防ぎ、薬剤を増やすことができたそうです。

● 京大発の新薬 「KUS121」への期待 続いて、京大大学院生命科学

心不全治療薬のなかでも小野先生はSGLT2阻害薬に焦点を当てて深掘りをされました。SGLT2阻害薬に関する臨床試験は多数行われていますが、このうち糖尿病の標準治療を受けている患者を、プラセボを投与する群とSGLT2阻害薬を投与する群とに分けて比較した結果、後者の方が心不全による入院が少ないことが明らかになったという報告についてはじめにお話しくださいました。その後、糖尿病の有無によらずSGLT2阻害薬が心不全の予後を改善することが示されたとのこと。

心不全の治療に関しては、過去40年にわたり、左心室の収縮機能(LVEF)が低下した心不全(HFpEF: LVEF > 40%)の治療研究が進んでおり、ACE阻害薬やβ遮断薬、MRA、ARNI、SGLT2阻害薬などが順番に効果を示してきたとのこと。また最近では、LVEFが保たれた心不全(HFpEF)も同じくこれらの症例数があるのではないかと考えられています。

また、心不全に対してはフアンタステック4とよばれるARNI、β遮断薬、MRA、SGLT2阻害薬の4剤を使うことが推奨されていますが、この中でもSGLT2阻害薬は血圧の低下といった副作用が少なく使いやすいため、中止されることも少ないこととされています。また、「どの順番でどの程度使うのか」が焦点となり、STRONG-HF試験におけるguideline-directed medical therapy (GDMT)に則ったこれら薬剤の急速増量戦略がEFによらず効果的だという結果が得られたそうです。

一方、カテコラミンは細胞内Ca²⁺濃度の増強作用を持つため、不整脈や心筋の線維化に繋がり、長期予後の改善は見込めません。そのため、KUS121を用いることによって、カテコラミンを使用している重症心不全患者からカテコラミンの脱却を図ることができるよう可能性が示唆されているそうです。

研究科の垣塚彰先生が開発された「KUS (Kyoto University Substance) 121」を新規の心不全治療薬として使える可能性についてお話しされました。KUS121は、細胞内のVCP蛋白と呼ばれる蛋白のATPaseのみを選択的に抑制することによって、細胞内のATP濃度を維持する働きを持つとのこと。ATP濃度を維持させるので、まずは心筋梗塞(虚血再灌流)に使用できるのではないかと考え投与し、一定の効果は得られたのですが、臨床現場では心筋梗塞の治療薬として使いづらく、心不全の治療薬としての開発をスタートさせました。

今回は、芝蘭会徳島支部総会と寺井先生の研究紹介、尾野先生の特別講演取材させていただきありがとうございました。創傷治療という馴染みのある現象に対して「見える」ということを意識して研究し、そのメカニズムを解明させるべく、4回生 福田大智、反田武志、

芝蘭会館別館 併設 「SHIRAN CAFE」をご利用ください
シランカフェ

なつかしいキャンパスのそばで、同窓会、懇親会、忘年会はいかがですか？
メニューなど詳細はこちら ↓

「なりすまし電話」にご注意ください

最近、芝蘭会員の方々へ芝蘭会員または京大医学部事務職員の名前をかたって、個人情報(住所、電話番号等)を聞き出そうとする不審な問い合わせの電話があるということを会員の方からご連絡をいただいております。芝蘭会とは全く関係がございませんので、くれぐれもご注意ください。なお、芝蘭会では会員の方から住所変更等のご連絡がない限り、事務局からはお問い合せはいたしておりません。ご不審なことがありましたら、芝蘭会事務局までご連絡ください。

芝蘭会事務局 TEL ● 075-751-2713 FAX ● 075-752-4015

退任あいさつ

17年間の感謝と 新たな挑戦



デューク大学
心臓血管胸部外科教授
伊達洋至

2025年1月末をもって、私は京都大学呼吸器外科教室教授を退任し、2月からデューク大学心臓血管胸部外科教授に就任いたしました。

京都大学に就任して17年余り、本当に幸せな時間を過ごさせていただきました。岡山大学より2007年に着任した当時、腫瘍外科としての発展、肺移植の再開と発展、日本の呼吸器外科学への貢献を3つの大きな目標に掲げました。今では、肺移植手術の多くは胸腔鏡やロボットを使った低侵襲手術で行えるようになり、私が医師になった40年前は全例が開胸手術でしたので、手術技術は驚くほど進歩したと思います。

在任中に実施した肺移植数は375例であり、京大は日本で最も多くの肺移植を行っている施設となりました。その5年生存率は約75%であり、世界の平均を20%近く上回っています。さらには、左右反転移植、ABO血液型不適合移植や生体肺肝同時移植など、さまざまな世界初の肺移植を行ってきました。

京大在職中に発信した英語論文は600本を超えました。日本の呼吸器外科教室の中では、最も多くの、そして質の高い英語論文を発信してきた教室であると自負しています。内容も肺移植や肺腫瘍など幅広い分野をカバーしました。また、教室員の50名が医学博士となり、同門

の8名が教授となりました。私は、2025年3月末をもって、京大呼吸器外科教授職を定年退職し、メスを置くつもりでおりました。ところが、米国よりお誘いをいただき、熟慮の結果、デューク大学に異動することにしました。私にはデューク大学との直接的なつながりはなく、実はどこにあるのかさえ知りませんでした。客観的に考えると、なぜ65歳の日本人を名門デューク大学が教授として迎え入れてくれたのか、不思議な感じがします。多くの人のつながりや、過去の学術的功績を評価していただけたものと思っています。

デューク大学は、すでに2600例を超える肺移植実績があり、その数は全米一です。私は、教授として肺移植や肺腫瘍の手術を担当し、若手医師や医学生を教育する責務をいただいております。この年になって新たな挑戦の機会に恵まれたことに感謝し、頑張ってきたこととお礼を申し上げます。

最後に、京大では多くの人との出会いがあり、戸口田淳也先生、山中伸弥先生、椛島健治先生らとはランニング仲間になりました。苦業を共にした多くの教室員、多大な御協力と御支援を賜りました芝蘭会の皆様にもより感謝申し上げます。

「芝蘭会費」の納入は、 便利な「自動引き落とし」 をご利用ください

平成17年度より芝蘭会費の納入方法として、「銀行口座等からの自動引き落とし」を採用させていただいております。会費納入のお手間が大幅に省かれ、また、会費の二重払いの防止にもつながります。ぜひ、ご利用いただきたくお願い申し上げます。お手続きについては、下記、芝蘭会事務局まで、お気軽にお問い合わせください。

芝蘭会事務局

TEL 075-751-2713

FAX 075-752-4015



開設125周年を迎えた京都大学医学部附属病院

学生の活動報告 女性医学研究者の キャリア開拓プロジェクト

その1
予告編

FREEsia

昨今、日本における女性研究者の少なさが課題として指摘され続けています。京都大学医学分野においても、博士課程へと進む女性は一定数存在するものの、講師、助教、准教授とキャリアを積み重ねるにつれ、その割合は大きく減少し、女性教授はわずか約10%にとどまっています(2022年度)。このような現状では、研究の道に興味があるにもかかわらず、将来のキャリアパスを想像できないため、研究者としてのキャリアに対して消極的になってしまっている医学部女子学生が潜在的に多く存在すると考えます。

また、この問題は単に女性のみ課題にとどまりません。男性も、ジェンダー観による制約を受けている、つまり「理想の男性像」に縛られているという現状があります。また、日本でこれまでに実施されてきた女性研究者支援策の中には、女性視点に偏ったアプローチが多く、男女双方からの反発を招くケースも見られます。そのため、ジェンダー間の相互理解を深め、男女双方の視点を取り入れた包括的な解決策が求められます。

このように、性別による不均衡が存在する社会では、生き方や選択肢が制限されてしまいがちです。これを解決するには、女性のキャリアアップのためにどうすればよいか、また、男女の相互理解を推進し、性別によりキャリアを制限されない社会を実現するにはどうすればよいかを模索し、抜本的な解決策を講じることが重要です。

本プロジェクトでは、こうした現状を打開し、日本における新しい医学研究者のキャリアパスを

切り拓くための道標を示すことを最終目標としています。そこで、私たち「FREEsia」は、実際に海外や国内の研究室を訪問し、様々な研究者へのインタビューを実施し、その内容をとりまとめ、制度・文化・社会的側面から多角的に分析します。そうして得られた知見をもとに、日本において女性研究者が少ないう原因を究明し、女性のキャリアアップや男女間の相互理解を促進するための具体的な変革案を提示します。こうした取り組みを通して、最終的には男女関係なくすべての人々が生き生きとそれぞれの能力を発揮できる社会の実現を目指します。

本プロジェクトを実施するチーム「FREEsia」は、京都大学医学部医学科4回生の学

チーム名「FREEsia」の由来

「FREEsia」は、花の「フリージア」に由来します。男女関係なく、自由にやりたいことに邁進できる社会を実現するためには、信頼や感謝といった価値観が必要不可欠です。フリージアの花言葉である「親愛の情」、「友情」、「感謝」は、私たちのプロジェクトの理念と深く一致していると考え、この名前を採用しました。また、誰もが自由にその能力を発揮できる社会の実現を願い、「Freesia」の「Free」を強調する形で大文字表記としました。

生5名(吉良花蓮、小澤翔馬、北畑圭亮、白樺聖夢、速見紗和子)で構成しています。なお、本プロジェクトは、京都大学の男女共同参画事業である「女子学生チャレンジプロジェクト(令和6年度)」に応募し、採択されました。今後の詳しい成果報告等は次号以降の「芝蘭会報」に掲載予定です。ぜひ注目いただければ幸いです。(文責・4年生 吉良花蓮)



左から、北畑、速見、吉良、白樺、小澤

人事異動

Table of personnel changes including names, positions, and departments such as R6.3.31 飯間 麻美, R6.9.30 高橋 由光, etc.

Table of personnel changes including names, positions, and departments such as R6.11.1 宇藤 恵, R6.12.1 牧山 武, etc.

※前号(216号)に掲載漏れがございました。お詫びいたします。

訂正とお詫び

芝蘭会報第217号1頁の「令和6年度春の叙勲」の記事に誤りがありました。

【誤】瑞宝重光章 千葉 幸夫

【正】瑞宝中綬章 千葉 幸夫

会員ならびに関係者の皆様には、大変ご迷惑をおかけいたしました。謹んでお詫びいたします。

謹んでご冥福をお祈りいたします

日付はご逝去日

Table of obituaries listing names, birth/death dates, and family members such as 西村 博, 山下 脩, 石谷 良二, etc.

会員計報



76回・2024 (令和6)年版 「芝蘭会会員名簿」を刊行しました!

この度、令和6年11月末に「芝蘭会会員名簿」を刊行いたしました。名簿作成にあたり、会員の皆様から快く異動情報等をお寄せいただき、感謝申し上げます。

- 会員名簿：A4判、909頁
●会員頒布代：1部 5,500円 (消費税を含む)
※但し、会費納入者に限る。その他は 11,000円 (税込)
●送料：900円

芝蘭会事務局 TEL 075-751-2713 FAX 075-752-4015



原稿募集

芝蘭会報は、会員の皆様の情報交換・意見発表の場であり、支那活動、クラス会、会員の著書の紹介(自薦・他薦)及び医学・医療等に關するご意見を寄稿ください。

事務局から

平成17年4月からの「個人情報保護法」の全面施行により、個人情報の取り扱いに厳しい制約が課せられました。つきましては、会員の連絡先等のお問い合わせは、必要理由等を明記の上、郵便またはFAXにより事務局までご送付ください。

芝蘭会報編集委員会

- 委員長 森信曉雄
委員 中村保幸、吉岡秀幸、清川岳彦、園部誠、松村由美、甲斐亜沙子、諫田淳也

芝蘭会誌誌部

- 顧問 森信曉雄
(6回生) 三宅大河、小林空輝、小澤向陽、野田春菜
(4回生) 大島輝、福田大智、反田武志

芝蘭会事務局

- 事務局長 山田均
管理課長 森勝二
総務課 秋山和美
制作協力 京都通信社